

宗教系大学と指導者養成

宗教系学校は、学校教育を通して建学の理念を体現するべく、当該教団に所属する信者の子弟子女に対する宗教的知識教育や宗教的情操教育を施している。教団や組織の維持という視点からみれば、信者を確保するうえでは次世代に信仰を伝える必要がある一方で、現実的に寺社や教会を持続可能的に運営するうえで、後継者や指導者を育成していく必要がある。

したがって、キリスト教系大学が神学部を廃止したり、神道系大学が神職養成課程を、仏教系大学が僧侶養成課程を廃止したりするのは考えにくい。もちろん、大学の養成課程で学ばなくても、本山や教団本部での修行や講習を経て、指導者資格を得ることは可能である。しかしながら、聖典の書かれた言語を習得したり、神学書などを丹念に学ぶうえで、教育機関の役割は大きい。近年では、動画サイトやウェブサイトでも情報が簡単に手に入るようになった。

しかしながら、「まっすぐな線」に見えても、手書きで書いた線は定規を用いて引いた線と異なる。大学全入時代を迎えつつある日本では、本来の大学教育や専門的知識に重きが置かれなくなる傾向が見られる。とは言え、批判的思考力や確かな知識を得るうえで専門性に基づいた大学教育は重要である。今回は、イスラームにおいて宗教的な知がどのように学ばれているのかを、学びという側面から扱ってみたい。

イスラームにおける教えの知

イスラームは、西暦7世紀に始まり、1400年以上も続いてきた。イスラームでは、キリスト教のカトリックで言うローマ法王のような宗教的権威は存在していない。そのため、イスラームという宗教は、イスラームを信じている人々によって構成されているそれぞれの共同体に特徴づける。教えを権威づける者が存在しないゆえに、それぞれのイスラーム理解があると言える。

言うまでもなく、イスラームにおける教えの知を有しているのは、啓示を受け取った預言者ムハンマドであった。彼は政治的手腕に優れており、自らが預言者であったことからイスラームという宗教を最も知っている存在であると言える。したがって、イスラームにおける理想的指導者像は、政治的能力と宗教的能力の両方を兼ね備えた人間であるとされる。さらに、イスラームではムハンマドが体現した政教一致が、理想的な社会のあり方と考えられる。

預言者ムハンマドの死後、スンナ派ではカリフ、シーア派ではイマームと呼ばれる指導者が、ムハンマドを後継する者というかたちでイスラーム共同体を率いてきた。しかしながら、イスラームにはムハンマドのような存在は再び現れなかった。そこで、政治権力と宗教的知は少しずつ乖離していった。つまり、政治的実権を握っている者が、必ずしもイスラームの教えに詳しいとは限らないという状況に陥ったのである。そこで重要となったのが、ウラマーと呼ばれる学者たちである。

「ウラマー」という語は、「アーリム」(知を有する者)というアラビア語の複数形である。彼らは指導者の政治的決定から庶民の日常生活にいたるまで、イスラームの教えに基づく生き方をするうえで非常に重要な役割を果たしている学者である。

つまり、日々の生活を送るうえで、イスラームの信仰に基づいて生きるうえでのサポートを行う存在であると言える。

学問の修得方法

知を有する者(ウラマー)という存在が登場するということは、何らかの知が体系化され、学ぶことが可能になった状態であるとも言える。いったん学問的知識が体系化されると、それを学ぶ方法も定式化されていく。その結果、定められた方法で学ばない限りは、修得したとみなされないことになった。

学びを修得した者には、修得免許状(イジャーザ)が与えられる。教えるための免許状と言え、日本人にとって馴染みのあるイメージで言えば教員免許状や、茶道などの免許かもしれない。しかしながら、イスラームにおける修得免許状は、「教師の口述を筆記したテキストや原本から書き写した写本が読誦され、それを教師が確認するというかたちで読誦証明」が出されるという仕方⁽¹⁾で出されるものであった。読誦と言っても単に読むだけではなく、諳んじて唱えられるくらいのレベルが求められた。筆記されたテキストはあくまでも確認用で、基本的には口承で伝えられたのである。

ウラマーたちが歴史的にいつごろから登場したのかは、明らかではない。ただし、神の啓示であるクルアーンがムハンマドから口承で伝えられ、後に一冊の書物としてまとめられるまでには、人々の記憶が重要な記録媒体であった。というのも、当時、アラビア語は話し言葉としては用いられていたが、文字としての体系化は不十分だったからである。

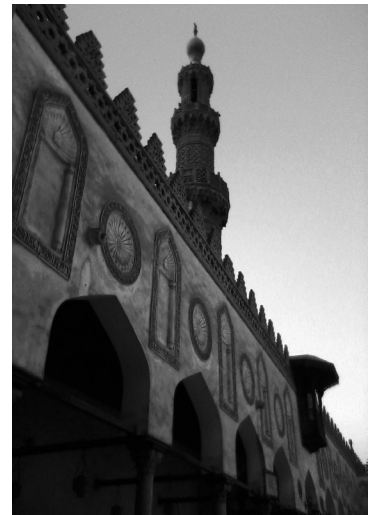
イスラームの教えを学ぶことは、師と出会うことでもあり、学ぶことができる教育機関を探すことでもあった。私たちにあって、師と呼べる人との出会いが重要であるように、どのような学びの機会を得るかというのは、その後の人生を左右する。

預言者ムハンマドが発した言葉として伝えられるものに、「知を求めるならば中国まで行け」というものがある。本当に彼が発した言葉かと言え、その真偽は疑わしいと言われているが、この言葉はイスラームにおいて教えを学ぶことがいかに重要かを端的に表している。中東に住むムスリムたちにとって、当時、中国とは世界の果てであった。

教えを学ぶ必要があるならば、自ら求めよ。教えを学ぶことが求道であるのは、いずれの宗教の信仰者についても言えることではないだろうか。

[註]

(1) 谷口淳一『聖なる学問、俗なる人生—中世のイスラーム学者』山川出版社、2011年、34頁。



スンナ派の最高学府の一つであるアズハル・モスク(エジプト・カイロ)世界最古の大学とも言われている。(2012年 筆者撮影)